

志木市の文化財 第61集

田子山遺跡第 131 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

埼玉県志木市教育委員会

THE HISTORY OF THE

The history of the world is a long and varied one, filled with many interesting events and people. It is a story that has been told for centuries, and it continues to be told today. The history of the world is a story of progress, of discovery, and of the human spirit. It is a story that has shaped the world we live in today, and it will continue to shape the world of the future.

THE HISTORY OF THE

はじめに

志木市教育委員会
教育長 尾崎 健市

ここに刊行する『田子山遺跡第131地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』は、平成26年度に受託事業として、教育委員会が発掘調査を実施した成果をまとめたものです。

田子山遺跡は、志木市では古くから、住宅建設が進んでおり、昭和62(1987)年度に国庫補助事業による埋蔵文化財保存事業が始まる際にはすでに住宅地となっていた状況と言えます。その際には田子山遺跡は、現在ほど遺跡範囲も広くなく、細田学園の東側に広がる程度にすぎませんでした。その後、第1地点が昭和63(1988)年度に実施されて以来、今年度の最新の調査によると現在、第136地点の調査が実施されており、本町地区においては、最多の調査件数にのぼっています。また、調査面積においても現在、約7万4千㎡を有し、志木市では西原大塚遺跡に次いで2番目に大きな遺跡と言えます。

さて、今回報告する田子山遺跡第131地点は、細田学園の校舎建替工事に伴い発掘調査が実施されました。これにより、縄文時代の土坑4基、弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代の住居跡5軒、平安時代の掘立柱建築遺構1棟、土坑4基、溝跡2条などの遺構そして多くの貴重な遺物が発見されました。

中でも特筆すべき事項として、田子山遺跡においては、今までの調査成果により、平安時代における住居跡や土坑・柱穴などの発見が相次いでいることから、奈良・平安時代におけるこの一帯は、広範囲に集落が営まれていたことが判明しています。そのため、今回の調査においても平安時代の住居跡や溝跡、掘立柱建築遺構などの発見は、さらなる歴史の追究を行う上で重要な発見につながったものと評価できるものです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた、学校法人細田学園、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市本町二丁目1700-1番地所在の田子山遺跡第131地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、校舎建替工事予定地における緊急調査として、志木市教育委員会が行った。また、埋蔵文化財保存事業の実施にあたり、発掘作業・整理作業・報告書刊行作業を、共和開発株式会社に支援業務として委託したものである。
3. 発掘作業は、平成26年5月21日より開始し、平成26年8月18日に終了した。整理作業は、平成26年8月19日より共和開発株式会社聖蹟桜ヶ丘研修センターにて行い、平成27年3月16日、本書の刊行をもって終了した。
4. 本書は、尾形則敏・徳留彰紀が監修し、宮下孝優（共和開発株式会社）が編集した。執筆は第1章、第2章第1節を尾形、その他を宮下が行った。
5. 本調査において出土した遺物および写真等の記録類は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。
6. 調査体制

【志木市教育委員会組織】

調 査 主 体 者	志木市教育委員会
教 育 長	尾崎健市（平成24年7月～）
教 育 政 策 部 長	菊原龍治（平成25年4月～）
担 当 課	生涯学習課生涯学習・文化財グループ
生涯学習課長	松井俊之（平成25年4月～）
生涯学習課副課長	伊藤久峰子（平成25年4月～平成26年3月）
〃	桶田修平（平成26年4月～）
生涯学習課主幹	井上茂（平成26年4月～）
生涯学習課主査	尾形則敏（平成21年4月～）
〃	武井香代子（平成24年4月～）
〃	浅見千穂（平成21年4月～）
生涯学習課主任	松永真知子（平成18年4月～）
生涯学習課主事	徳留彰紀（平成22年4月～平成25年3月、平成26年4月～）
〃	矢田佳生（平成22年4月～平成26年3月）
〃	大久保聡（平成25年4月～）
調 査 担 当 者	尾形則敏・徳留彰紀・大久保聡
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）（平成24年4月～）
〃	高橋長次・高橋豊・深瀬克・上野守嘉（委員）

【共和開発株式会社調査部】

調 査 員 宮下孝優
発掘・整理作業参加者

石村 崇・扇田芳嗣・合田芳正・五味正道・斎藤由美子・高田彩子・高橋広行・
高森裕一・高林 均・田澤 真・中野高久・中村雅美・中山弘人・羽吹潤一・
針木康介・松澤 匡・室賀明子・本山直子

7. 発掘作業及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。
記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立
埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・
富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

江原 順・加藤秀之・川田壽文・川畑隼人・隈本健介・小出輝雄・齊藤 純・
齋藤欣延・斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・照林敏郎・野沢 均・早坂廣人・
堀 善之・前田秀則・松本富雄・柳井章宏・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

8. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種通知については下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）／平成26年5月30日付け 教
生文第5－216号

○埋蔵物の文化財認定について／平成27年2月20日付け 教生文第7－297号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は、以下の通りである。

第1図 1：10,000「志木市全区」アジア航測株式会社調製

第2図 1：2,500ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン

2. 挿図版の縮尺は、各図中に明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示したが、土器の場合は赤彩範囲を示し、遺物番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。
7. 遺物一覧中の計測値の単位は、長さがcm、重さはgである。また、()は推定値、[]は現存値を示している。
8. 本文および遺物一覧中の土器の器種については、「形土器」を省略している。
9. 遺構等の略記号は、以下の通りである。

Y = 弥生時代の住居跡 H = 古墳時代後期～奈良・平安時代の住居跡

T = 掘立柱建築遺構 D = 土坑 M = 溝跡 P = ピット Tr = トレンチ

目 次

はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表目次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	7
第2章 発掘調査の概要	12
第1節 調査に至る経緯	12
第2節 調査の経過と調査方法	13
第3節 基本層序	15
第3章 検出された遺構と遺物	17
第1節 縄文時代	17
第2節 弥生時代後期	19
第3節 古墳時代後期・平安時代	21
第4節 遺構外出土遺物	41
第4章 調査のまとめ	42
第1節 縄文時代	42
第2節 弥生時代後期	42
第3節 古墳時代後期・平安時代	42

引用・参考文献

図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)	2
第 2 図	田子山遺跡の調査地点 (1/3,000)	8
第 3 図	確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況 (1/500)	14
第 4 図	基本層序 (1/500・1/60)	15
第 5 図	遺構分布図 (1/500)	16
第 6 図	縄文時代土坑 (1/60)	18
第 7 図	24 号住居跡 (1/60)	19
第 8 図	24 号住居跡出土遺物 (1/3)	24
第 9 図	73 号住居跡・掘り方 (1/60)	22
第 10 図	73 号住居跡カマド・掘り方 (1/30)	23
第 11 図	73 号住居跡遺物出土状況 (1/60)	24
第 12 図	73 号住居跡出土遺物 (1/3)	24
第 13 図	74 号住居跡・掘り方 (1/60)	25
第 14 図	74 号住居跡カマド A・掘り方 (1/30)	26
第 15 図	74 号住居跡カマド B・掘り方 (1/30)	27
第 16 図	74 号住居跡カマド C・掘り方 (1/30)	27
第 17 図	74 号住居跡遺物出土状況 (1/60)	28
第 18 図	74 号住居跡出土遺物 (1/3)	29
第 19 図	75 号住居跡 (1/60)	30
第 20 図	75 号住居跡出土遺物 (1/3)	30
第 21 図	76 号住居跡・掘り方 (1/60)	31
第 22 図	76 号住居跡カマド・掘り方 (1/30)	32
第 23 図	76 号住居跡遺物出土状況 (1/60)	33
第 24 図	76 号住居跡出土遺物 (1/3)	33
第 25 図	13 号溝跡出土遺物 (1/3)	34
第 26 図	4 号掘立柱建築遺構 (1/60)	35
第 27 図	13 号溝跡 (1/150・1/60)	37
第 28 図	14 号溝跡 (1/60)	38
第 29 図	古墳時代後期・平安時代の土坑 (1/60)	39
第 30 図	225 号土坑出土遺物 (1/3)	40
第 31 図	遺構外出土遺物 (1/3)	41
第 32 図	溝跡分布・想定図 (1/500)	43
第 33 図	近隣の溝跡分布図 (1/3,000)	44

表 目 次

第 1 表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
第 2 表	田子山遺跡発掘調査一覧	9
第 3 表	志木市発掘調査報告書一覧	10・11
第 4 表	田子山遺跡第 131 地点の発掘調査工程表	15
第 5 表	縄文時代ピット一覧	18
第 6 表	24 号住居跡出土遺物一覧	20
第 7 表	73 号住居跡出土遺物一覧	25
第 8 表	74 号住居跡出土遺物一覧	28
第 9 表	75 号住居跡出土遺物一覧	30
第 10 表	76 号住居跡出土遺物一覧	32
第 11 表	13 号溝跡出土遺物一覧	34
第 12 表	225 号土坑出土遺物一覧	40
第 13 表	古墳時代以降のピット一覧	40
第 14 表	遺構外出土遺物一覧 (縄文時代)	41

図 版 目 次

図版 1	1. 1・2 区全景	2. 3 区全景		
図版 2	1. 4 区全景	2. 219 号土坑	3. 220 号土坑	4. 221 号土坑 5. 226 号土坑
図版 3	1. 24 号住居跡	2. 24 号住居跡 遺物出土状態	3. 73 号住居跡	4. 73 号住居跡 カマド
				5. 73 号住居跡 遺物出土状態
				6. 74 号住居跡
				7. 74 号住居跡 カマド A
				8. 74 号住居跡 カマド B
図版 4	1. 74 号住居跡 カマド C	2. 74 号住居跡 遺物出土状態 1		
		3. 74 号住居跡 遺物出土状態 2	4. 74 号住居跡 掘り方	5. 75 号住居跡
		6. 76 号住居跡	7. 76 号住居跡 カマド	8. 76 号住居跡 カマド遺物出土状態
図版 5	1. 76 号住居跡 P 2	2. 4 号掘立柱建築遺構 1	3. 4 号掘立柱建築遺構 2	
		4. 13 号溝跡	5. 13 号溝跡 土層断面	6. 14 号溝跡
		7. 14 号溝跡 土層断面	8. 222 号土坑	
図版 6	1. 223 号土坑	2. 224 号土坑	3. 225 号土坑	4. 旧石器時代試掘坑
	5. 見学風景 1	6. 見学風景 2	7. 作業風景	8. 作業風景
図版 7	1. 24 号住居跡出土遺物	2. 73 号住居跡出土遺物		
図版 8	1. 74 号住居跡出土遺物	2. 75 号住居跡出土遺物	3. 13 号溝跡出土遺物	

4. 76号住居跡出土遺物

図版 9 1. 225号土坑出土遺物 2. 遺構外出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約7万3千人の自然と文化の調和する都市である。

地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新部遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63.540㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	81.310㎡	畑・宅地	城郭跡・集落跡	旧石器、縄（早割～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡築基、溝造築基等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、溝造築基遺物等
5	中道	52.980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	163.930㎡	畑・宅地	城郭跡・墓跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新部	20.080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74.030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（早割～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム探検遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	12.000㎡	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2.800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4.900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7.700㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	13.800㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1.700㎡	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		500.470㎡					

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧

平成26年11月1日現在



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

平成26年11月1日現在

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2ヶ所、平成7年(1995)度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13(2001)年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。

また、城山遺跡では、平成13(2001)年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21(2008・2009)年に発掘調査が実施された第62地点(道路・駐車場部分)でも1ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。最新では、平成23(2011)年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点2ヶ所、礫群9基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18(2006)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉(条痕文系)の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23(2011)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとめて出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡(黒浜式期)、城山遺跡では住居跡(諸磯式期)が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認

定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつあり、中期末葉からは遺跡が減少する傾向にある。そのうち、西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されている。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。最新資料では、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鉋形住居（敷石住居）1軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千綱式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、竈目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧1点出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品1点と西原大塚遺跡17号方形

周溝墓出土の鳥形土製品1点・壺形土器4点については、考古資料として、平成24年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15(2003)年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7(1995)年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期(7世紀中葉)の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14(2002)年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げる事ができる。城山遺跡では、平成8(1996)年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器環や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20～21(2008～2009)年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶とよひのみことが2枚とその近くからは鉄鎌1点と土鏝1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を超える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸軋が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器片が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点については、考古資料として、平成24年3月1日付けで、市指定文化財に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』(註1)にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雑記』(註2)に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鋳の札である鉄製品1点と鉄鏝1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ビット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、

古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「しょうりんざんかんのんじだいじいん松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する田子山遺跡について概観することにする。

田子山遺跡は、志木市柏町2丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北東約1.3kmに位置している。本遺跡は、新河岸川右岸の台地上に立地しており、標高は約15m、低地との比高差は約10mであり、南北方向に約100m、東西方向に約500mの広がりをもち、遺跡の面積は約74,000㎡である。

遺跡の周辺を眺めてみると、大きな建物で言えば、今回報告する細田学園とその北側に隣接するマンション（第31地点）が存在するのみで、その他として敷島神社・御嶽神社、そして古くから個人住宅・共同住宅などの小規模住宅が密集していることから、市内でも閑静な住宅地と言えるであろう。

最近では、個人住宅の建物の老朽化による新築工事や相続による土地売買により分譲住宅建設などが原因による小・中規模開発が急激に増加している状況である。

本遺跡は、これまでに135回の調査（平成26年11月25日現在）が実施され、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世、近代に至る複合遺跡であることが判明している。

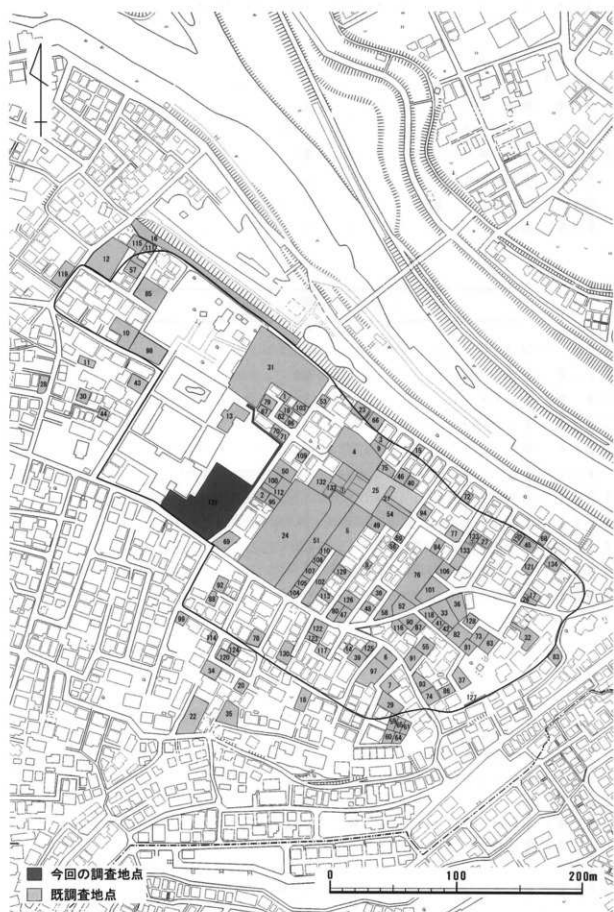
[註]

註1 『館村日記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）ののりみやまのりみ名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻国雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

[引用文献]

- 神山健吉 1988 「『廻国雑記』に現れる 大石信濃守の館と十五坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号



第2図 田子山遺跡の調査地点 (1/3,000)

平成26年11月1日現在

調査地点	面積 (㎡)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺 蹟 の 概 要	文献名 第3表文献 No.
第1地点	80.41	昭和63年5月16日	昭和63年5月17日～20日	個人住宅建設	(弥生後期)住居跡1軒	No.9
第4地点	896.00	平成元年9月26日	平成元年9月27日～11月1日	共同住宅建設	(縄文)土坑1基(弥生後期)住居跡1軒(奈良・平安)住居跡9軒(中世以降)土坑1基	No.13
第5地点	896.00	平成元年11月6日	平成元年11月13日～30日	共同住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(奈良・平安)住居跡9軒・土坑1基(中世以降)土坑2基	No.13
第6地点	170.60	平成2年6月7日	平成2年6月8日～30日	個人住宅建設	(平安)住居跡1軒(中・近世)土坑1基	No.12
第7地点	167.57	平成2年7月17日	平成2年7月18日～20日	個人住宅建設	(平安)住居跡1軒・溝跡1本?	No.12
第10地点	313.83	平成2年10月16日	平成2年10月18日～11月14日	共同住宅建設	(縄文中期)住居跡1軒(弥生後期)住居跡5軒	No.17
第13地点	189.00	平成3年2月8日	平成3年2月13日～22日	校舎増築	(古墳後期)住居跡1軒	No.17
第19地点	63.54	平成4年6月29日	平成4年7月6日～21日	共同住宅	(縄文)土坑2基(平安)住居跡1軒	No.22
第21地点	104.20	平成4年9月7日	平成4年9月8日～28日	道路造成工事	(平安)住居跡4軒・土坑1基	No.22
第25地点	856.00	平成5年1月22日	平成5年2月24日～3月19日	共同住宅建設	(縄文早期)炉穴1基(平安)住居跡5軒	No.22
第29地点	238.05	平成5年8月30日	平成5年8月31日～9月6日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒	No.15
第32地点	181.21	平成6年7月19日	平成6年7月29日～8月12日	個人住宅建設	(縄文早期)土坑1基(弥生後期～古墳前期)方形周溝墓1基・溝跡1本	No.16
第37地点	167.77	平成7年2月20日	平成7年2月27日～3月11日	個人住宅建設	(平安か)土坑2基 ※古墳の周溝の可能性あり	No.16
第39地点	154.12	平成7年5月9日	平成7年5月16日～31日	個人住宅建設	(縄文早期)集石2基・炉穴2基(縄文)土坑3基(平安)溝跡3本	No.18
第41地点	55.80	平成7年8月22日	平成7年8月28日～9月5日	個人住宅建設	(平安)住居跡1軒・土坑1基	No.18
第42地点	55.80					
第47地点	114.32	平成8年6月12日	平成8年6月14日～20日	個人住宅建設	(平安)住居跡2軒・土坑1基	No.20
第48地点	74.15	平成8年12月4日	平成8年12月9日～17日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒	No.20
第49地点	133.47	平成9年1月9日	平成9年1月13日～18日	個人住宅建設	(平安)住居跡2軒・土坑1基(中世以降)土坑2基(近・現代)土坑1基	No.20
第69地点	121.32	平成12年4月24日	平成12年4月25日～5月11日	個人住宅建設	(縄文)集石1基(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒・溝跡1本	No.26
第78地点	173.10	平成13年6月8日	平成13年6月13日～7月10日	個人住宅建設	(縄文)集石1基(平安)住居跡2軒	No.28
第81地点	89.62	平成14年5月30日	平成14年6月10日～27日	個人住宅建設	(平安)住居跡1軒・土坑1基・溝跡1本 ※溝跡は古墳の周溝の可能性あり	No.30
第93地点	175.46	平成18年4月17日	平成18年4月24日～5月12日	個人住宅建設	(縄文早期)土坑1基(平安)住居跡3軒	No.45
第96地点	55.75	平成19年7月9日	平成19年8月20日	個人住宅建設	(縄文)土坑1基(古墳後期～平安)溝跡1本(平安)土坑1基・ビット1本	No.45
第107地点	105.78	平成20年12月19日	平成21年2月5日～10日	個人住宅建設	(古墳後期)住居跡1軒(平安)住居跡1軒	No.51
第121地点	145.73	平成23年3月9日	平成23年9月12日～28日	個人住宅建設	(縄文早期)集石1基・ビット5本・遺物包含層(中世以降)土坑1基・ビット1本	No.52

(未報告資料を除く)

第2表 田子山遺跡発掘調査一覧

第1章 遺跡の立地と環境

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発行者	執筆者
1	西原・大塚遺跡 発掘調査報告書	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上謙夫・宮合静男・谷井 彪・宮野本明
2	西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形剛敏
3	新部遺跡 発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形剛敏
4	新部遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点 発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形剛敏
5	城山遺跡 発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形剛敏・神山健吉
6	中道遺跡 発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形剛敏
7	城山遺跡長壽院地点 発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木保俊
8	志木市遺跡群I	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
9	志木市遺跡群II	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
10	西原大塚遺跡第7地点 新部遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
11	志木市遺跡群III	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
12	志木市遺跡群IV	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
13	中道遺跡第12地点 中道遺跡第13地点 田子山遺跡第4地点 田子山遺跡第5地点 発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
14	志木市遺跡群V	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形剛敏
15	志木市遺跡群VI	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形剛敏
16	志木市遺跡群VII	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏・深井憲子
17	城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 古畑遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
18	志木市遺跡群VIII	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏
19	西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告	1998	—	志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子
22	埋蔵文化財調査報告書1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子
23	西原大塚遺跡第45地点 発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳・上田 寛
24	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形剛敏・佐々木保俊・内野美津江
25	埋蔵文化財調査報告書2	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子
26	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形剛敏・佐々木保俊・深井憲子
27	埋蔵文化財調査報告書3	2002	志木市の文化財第34集	志木市教育委員会	尾形剛敏・佐々木保俊・深井憲子・佐々木 眞
28	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子
29	中野遺跡第49地点—東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告—	2004	志木市遺跡調査会調査報告第7集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・深井憲子・青木 修
30	志木市遺跡群14	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井憲子・青木 修
31	西原大塚遺跡第111地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳

第3表 志木市発掘調査報告書一覧(1)

No.	報告書名	刊行年	シリーズ名	発行者	執筆者
32	西原大塚遺跡第110地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第9集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳
33	鳩山遺跡第42地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第10集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
34	志木市遺跡群15	2006	志木市の文化財第37集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子
35	新部遺跡第8地点	2007	志木市遺跡調査会調査報告第11集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
36	中道遺跡第65地点	2007	志木市遺跡調査会調査報告第12集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・藤波啓吾・青木 修
37	西原大塚遺跡1～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書	2009	志木市遺跡調査会調査報告第13集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳
38	志木市遺跡群16	2008	志木市の文化財第38集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
39	西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第14集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
40	西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第15集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳
41	志木市遺跡群17	2008	志木市の文化財第39集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
42	鳩山遺跡第61地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第16集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
43	鳩山遺跡第58・60地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2008	志木市遺跡調査会調査報告第17集	志木市遺跡調査会	尾形剛敏・藤波啓吾・鈴木 徹・中村真理
44	埋蔵文化財調査報告書4	2009	志木市の文化財第40集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
45	志木市遺跡群18	2009	志木市の文化財第41集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
46	西原大塚遺跡第108地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2009	志木市の文化財第42集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形剛敏・坂上真嗣・青池紀子他
47	中野遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2010	志木市の文化財第43集	志木市教育委員会	佐々木保俊・内野美津江
48	市場裏遺跡第13地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2011	志木市の文化財第44集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形剛敏・青木 修
49	志木市遺跡群19	2011	志木市の文化財第45集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修
50	鳩山遺跡第63地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2011	志木市の文化財第46集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・坂上真嗣・青池紀子他
51	西原大塚遺跡第169地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第47集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形剛敏
52	鳩山遺跡第62地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第48集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修
53	鳩山遺跡第72地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第49集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・村上孝司・青池紀子他
54	田子山遺跡第121地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2012	志木市の文化財第50集	志木市教育委員会	徳留彰紀・尾形剛敏・藤波啓吾
55	志木市遺跡群20	2013	志木市の文化財第51集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修
56	鳩山遺跡第76地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志木市の文化財第52集	志木市教育委員会	尾形剛敏・大久保 聡・白崎智隆
57	鳩山遺跡第64地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志木市の文化財第53集	志木市教育委員会	尾形剛敏・深井恵子・青木 修
58	鳩山遺跡第71地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志木市の文化財第54集	志木市教育委員会	尾形剛敏・大久保 聡・中山哲也・二瓶秀幸・橋村太郎・加藤夏姫
59	西原大塚遺跡第174④地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2013	志木市の文化財第55集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・藤波啓吾・鈴木誠子
60	西原大塚遺跡第179地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2014	志木市の文化財第56集	志木市教育委員会	尾形剛敏・大久保 聡・二瓶秀幸・本山直子
61	中野遺跡第78地点 埋蔵文化財発掘調査報告書	2014	志木市の文化財第57集	志木市教育委員会	大久保 聡・尾形剛敏・青木 修
62	志木市遺跡群21	2014	志木市の文化財第58集	志木市教育委員会	尾形剛敏・大久保 聡・深井恵子・青木 修
63	埋蔵文化財調査報告書5	2014	志木市の文化財第59集	志木市教育委員会	尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修

第3表 志木市発掘調査報告書一覧(2)

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成26年1月、学校法人細田学園（以下、細田学園）及び大成建設株式会社より志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ土木工事計画地内における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。工事計画は志木市本町2丁目1700-1（面積2,196.00㎡）において、校舎建替工事を行うものである。

教育委員会は、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である子田山遺跡（コード11228-09-010）及び南側部分（既存校舎部分）については隣接地に該当するため、概ね下記のとおりに回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）及び試掘調査を実施した上で、当該地における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて協議する。
2. 確認調査及び試掘調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、保存措置を講ずること。また、現状保存及び盛土保存が不可能である場合、記録保存（発掘調査）を実施する必要があること。

さらに、現地にはまだ既存校舎が建っているということで、その状況確認と確認調査の箇所、そして校舎解体の時期等を判断することを目的に一度現地打合せを行うことで決定した。

平成26年1月20日、教育委員会は、工事主体者である学校法人細田学園（理事長 細田洋一郎）から確認調査依頼書を受理した。

2月5日、現地打合せを行った。その結果、既存校舎が建っていない中庭部分を先行して確認調査を実施し、既存校舎部分については、基礎部分（フーチング箇所）を残し解体作業を行い、その後試掘調査を行うこととし、さらに受水槽設置部分と配管部分についても設計図が整い次第にその位置が決定した後に実施することとした。

確認調査は、その後の日程調整により、中庭部分を2月18日から20日にかけて実施することとした。しかし、2月14日から15日にかけての大雪の影響により、確認調査の日程を2月26日から28日に変更し実施することとなった。調査は中庭部分の長方形の区画に対し、長軸のほぼ南北方向に4本のトレンチを基本に設定し、バックホーで表土を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑3基、平安時代の住居跡2軒・ピット16本ほど、中世以降の土坑4基ほどが検出された（第3図）。

3月11日、教育委員会は細田学園に確認調査の結果を報告し、今後の確認調査及び試掘調査の実施時期について検討した。その結果、既存校舎部分については、試掘調査を解体後に実施し、その後に契約締結などの手続きをするのでは工事完成時期が大幅に遅れてしまうと申し入れがあったため、既存校舎部分の試掘調査については、基礎部分の影響があるかどうかをまず1階床部分の一部（調査区南東隅）を解体し、その部分の試掘調査を実施することに決定した。つまり、その試掘調査の結果次第では、今後、遺存状態が良好な場合は、既存校舎部分のすべての範囲で試掘調査を実施する必要があるため、既存校舎部分の1階床の解体をすべて先行して実施し、その後に試掘調査を実施することとし、また遺存状態が悪い場合は、既存校舎部分の掘削工事がすべて同じ条件で行われていたものと判断することで、埋蔵文化財の所在は無いものと判断し、その後の確認調査を実施しないことで合意となった。

3月31日、既存校舎部分の一部（調査区南東隅）の試掘調査を細田学園及び大成建設の立会のもと実施した。調査は1教室分の範囲であり、ほぼ東西方向に1本のトレンチを設定し、バックホーで表土

を剥ぎ、遺構確認作業を行った。その結果、基礎工事の深度はフーチング部分及び校舎外回り部分のみが深く、それ以外では、現況G Lより深さ約80cmでローム面が確認でき、遺存状態が良好であることが判明した。その結果については、調査状況を見てもらいながら、細田学園及び大成建設に説明し、理解を得ることにより、今後の試掘調査については、既存校舎部分の1階床の解体後に再度実施することとなった。

4月2日、受水槽部分及び配管部分の確認調査を実施した。その結果、受水槽設置部分では、平安時代のピット3本と、配管部分では古墳時代後期～平安時代の住居跡3軒ほどが検出された。

4月8日、志木市埋蔵文化財保存事業取扱要綱に基づき、学校法人細田学園から、志木市埋蔵文化財保存事業委託申請書を受理した。

4月10日、既存校舎部分の試掘調査を実施した。その結果、調査区全体で平安時代以降のピット15本ほどが検出された。そのため、同日には大成建設に対し、今回の確認調査及び試掘調査の全体の結果報告を行い、同時に大成建設には発掘調査箇所及び調査面積を確定した。調査面積については、工事予定面積2,196.00㎡のうち1,076.12㎡と決定した。

その後、指名委員会により担当課契約と決定したため、民間調査組織5社による見積書徴収を行った。その結果、共和開発株式会社（代表取締役 加藤 直秀）が最低価格提示者と決定したため、志木市（市長 香川 武文）との間で5月21日、委託契約を締結した。同日、委託申請者である学校法人細田学園と埋蔵文化財保存事業にかかる協議書を取り交わし、同時に委託契約を締結した。

以上により、教育委員会を調査主体に共和開発株式会社が支援することにより、6月2日より発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過と調査方法

本調査は、平成26年2月26日～4月10日の間に行われた確認調査の結果とその後の協議を経て、平成26年6月2日より現地作業を開始した。調査面積は1,076.12㎡である。

調査は、敷地内の校舎新築範囲がその対象となり、中央部分を1区、南側を2区・3区として、調査区北東から北側を4区として調査を進めた（第3図）。

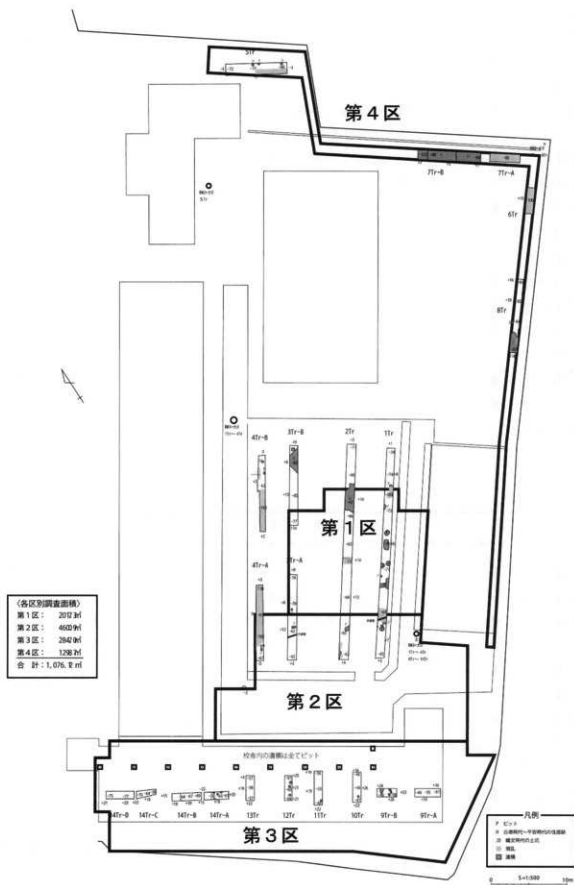
平成26年5月26日～30日にかけて、資材の搬入・基準点移動などの準備作業を行い、6月2日より調査を開始した。

建設工事との関係で、3区の調査を先行して行い、1・2区の調査と並行して4区の調査を行った。

調査区内の表土は重機によって除去した。発生土は調査区脇に仮置きし、各区の調査終了後に埋め戻しを行った。

表土除去後、遺構確認及び検出写真撮影を行い、その後、遺構の調査を開始した。遺構は、断面観察のために覆土を半載またはベルト状に残して掘り下げ、覆土の堆積状況を記録した。遺構の平面図については、トータルステーションにて国家座標と標高を記録し、現場にて図化した。遺物は出土位置を記録して取り上げを行い、微細な破片については、遺構及びグリッドごと一括して取り上げた。

発掘調査は、3区は6月2日～6月4日、1・2区は6月4日～7月28日まで行った。4区は6月



第3図 確認調査時の遺構分布図と調査区設定状況 (1/500)

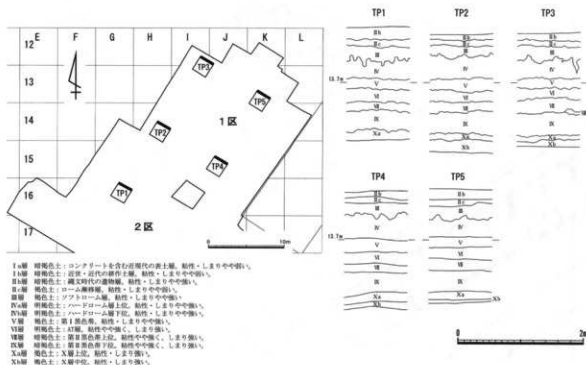
25日から6月27日まで南東側を調査し、8月1日から8月8日まで北側の調査を実施した。8月11日以降4区の埋戻しと撤収作業を開始し、8月17日に現地での作業をすべて終了した。

	平成26年(2014)		
	6月	7月	8月
1区調査	[調査期間]		
2区調査	[調査期間]		
3区調査	[調査期間]		
4区南東調査	[調査期間]		
4区北側調査			[調査期間]
73H	[調査期間]		
74H		[調査期間]	
75H		[調査期間]	
76H			[調査期間]
13M	[調査期間]		
14M			[調査期間]
4 T		[調査期間]	
219D	[調査期間]		
220D	[調査期間]		
221D	[調査期間]		
222D		[調査期間]	
223D			[調査期間]
224D			[調査期間]
225D			[調査期間]
226D			[調査期間]
撤収作業			[調査期間]

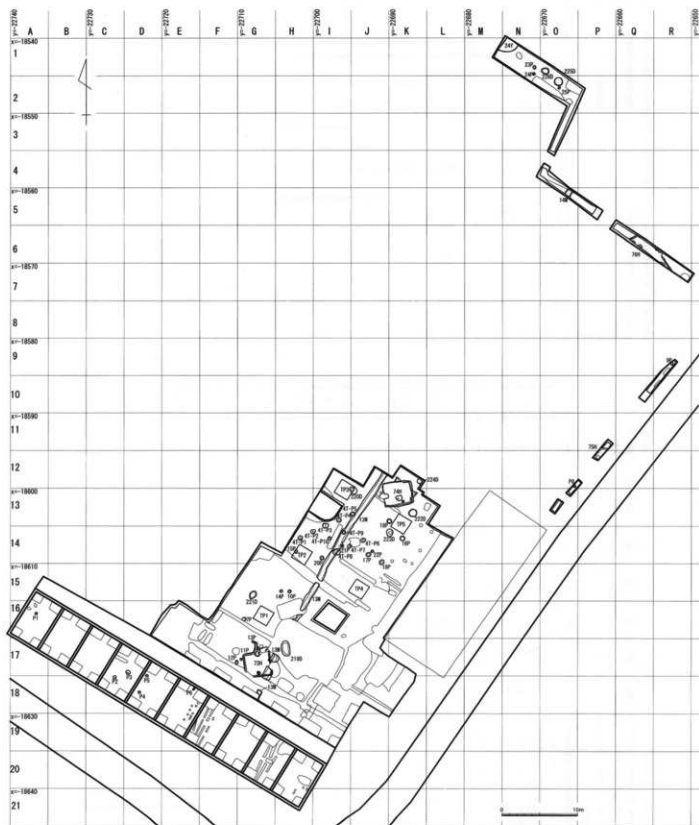
第4表 田子山遺跡第131地点の発掘調査工程表

第3節 基本層序

本調査区内では、5箇所の旧石器時代試掘坑を設定し、基本層序を記録した(第4図)。



第4図 基本層序 (1/500・1/60)



第5図 遺構分布図 (1/500)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

(1) 概要

縄文時代の遺構は、土坑4基・ピット12本が検出された。遺物は、縄文土器28点（早期17点・中期1点、時期不明10点）、石器1点（石皿）である。縄文時代の遺構の分布傾向は集中がみられず、非常に散漫な分布である。遺物の出土傾向も同様で、遺構から出土した遺物は219号土坑から出土した1点だけで、ピットからの出土はみられなかった。

(2) 土坑

219号土坑

遺構（第6図/図版2-2）

位置（H-17）グリッド。

検出状況 2区中央で検出された。

構造 平面形：楕円形である。断面形：浅い皿形を呈する。壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸210cm/短軸115cm/深さ35cm。長軸方位：N-2°-W。

覆土 暗黄褐色土を主体とした2層に区分される。

遺物 1点の縄文土器が出土しているが細片のため図示していないが、早期条痕文系土器である。

時期 出土遺物と覆土の様子から、縄文時代早期と考えられる。

220号土坑

遺構（第6図/図版2-3）

位置（J-13）グリッド。

検出状況 1区北西側で検出された。

構造 平面形：楕円形。断面形：浅い皿形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸110cm/短軸90cm/深さ54cm。長軸方位：N-62°-W。

覆土 暗黄褐色土を主体とし、2層に区分される。

遺物 なし。

時期 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

221号土坑

遺構（第6図/図版2-4）

位置（G-15）グリッド。

検出状況 2区中央西側で検出された。

構造 平面形：楕円形。断面形：浅い皿形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸123cm/短軸88cm/深さ20cm。長軸方位：N-34°-E。

[覆土] 暗黄褐色土を主体とし、2層に区分される。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

226号土坑

[遺構] (第6図/図版2-5)

[位置] (O-1) グリッド。

[検出状況] 4区北西部で検出された。

[構造] 平面形：楕円形。断面形：浅い皿形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸95cm/短軸85cm/深さ14cm。長軸方位：N-85°-W。

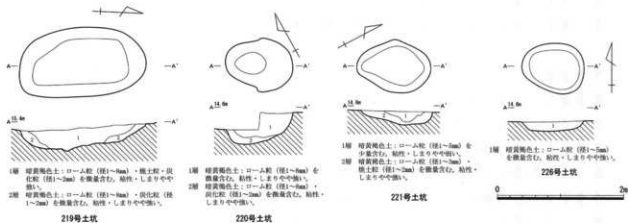
[覆土] 暗黄褐色土を主体とし、単層である。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から、縄文時代と考えられる。

(3) ピット

本調査地で検出したピット25本のうち、覆土の様子から12本を縄文時代に帰属するものとした。これらのうち、遺物の出土したピットはなく、一覧表にて報告する(第5表)。確認されたピットに明確な配列などは認められなかった。



第6図 縄文時代土坑(1/60)

遺構名	グリッド	区画	平面形	長軸	短軸	深さ	覆土
1P	A-16	3区	円形	36	32	20	暗黄褐色土
2P	C-18	3区	円形	42	41	21	暗黄褐色土
3P	D-17	3区	円形	59	51	22	暗黄褐色土
4P	D-18	3区	円形	34	31	42	暗褐色土
5P	D-17・18	3区	円形	36	33	52	暗褐色土
6P	E-18	3区	楕円形	46	23	19	暗黄褐色土
17P	J-14	1区	楕円形	65	53	24	暗黄褐色土
18P	J-14・15	1区	円形	73	60	28	暗黄褐色土
19P	J・K-13	1区	円形	66	57	27	暗褐色土
20P	I-14	1区	円形	51	49	25	暗黄褐色土
21P	I-14	1区	円形	37	35	25	暗褐色土
22P	J-14	1区	楕円形	37	33	19	暗褐色土

第5表 縄文時代ピット一覧

第2節 弥生時代後期

(1) 概要

弥生時代後期の遺構として、住居跡1軒を調査した。遺物は、住居跡から甕・甕・高環など、合計19点出土しており、大半が24号住居跡からの出土である。

(2) 住居跡

24号住居跡

遺構 (第7図/図版3-1・2)

位置 (M・N-1) グリッド。

検出状況 4区北西部で検出された。北・西側が調査区外に至り、北側の第31地点において北側半分の調査がされている。

構造 平面形：楕円形。規模：長軸(南北)2.10m、短軸(東西)1.80mを測る。床面までの深さは約20cmであるが、壁面での観察では35cmの深さを確認している。主軸方位：不明。壁溝：なし。床面：貼床。厚さは5cm前後。炉：住居跡南東部の床面に長軸42cm、短軸20cmの焼土の分布が認められる。火床は明確ではないが、炉と判断している。柱穴：なし。

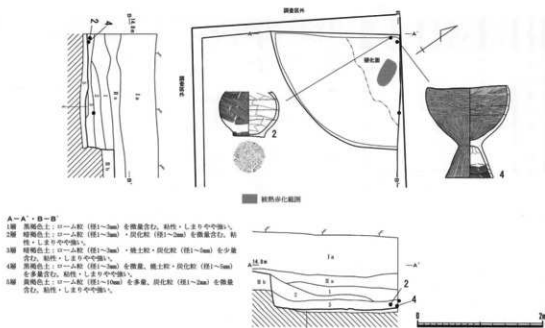
覆土 暗褐色土を主体とした4層に区分される。床面直上の4層には焼土の混入が多く、床面上には炭化物も分布していることから、焼失住居であると推定される。

遺物 17点の遺物が出土した。すべて弥生土器であり、甕13点、甕3点、高環1点である。

時期 弥生時代後期後葉。

遺物 (第8図/第6表/図版7-1)

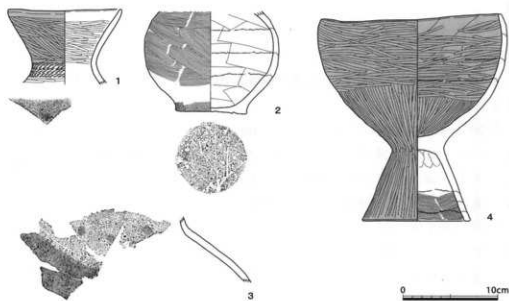
1は甕口縁部から頸部で、頸部にS字状結節文が施される。2は甕胴部から底部で、底部には木葉



第7図 24号住居跡 (1/60)

第3章 検出された遺構と遺物

痕が残る。3は壺頸部で、沈線区画内に無節の斜縄文、円形赤彩文が施される。4は高坏で内外面ともに赤彩され、全面に丁寧なへら磨き調整が施される。



第8図 24号住居跡出土遺物(1/4)

発見 番号	器種	遺存部位	口径 底径 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
第8図 1	壺	口縁部～頸 部	12.0 8.0	上層	内面：口縁部横ナデ／横へら磨き調整 外面：口縁部横へらミガキ／頸部S字状屈曲文3集／赤彩	細顆砂粒少量 褐色粒子微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
第8図 2	壺	胴上部～底 部	10.9 7.4	下層	内面：胴部横ナデ／輪轆痕 外面：横・斜ハケ目調整／内面へらナデ／輪轆痕／底部木葉痕	細顆砂粒少量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
第8図 3	壺	頸部破片	7.0	上層	外面：頸部沈線区画内無節L斜縄文・円形赤彩文(3)／無文部 赤彩	細顆砂粒少量 褐色粒子微量	良好	外面：明褐色 内面：明褐色
第8図 4	高坏	完形	19.1 22.05 11.4	下層	内面：口縁部横へら磨き調整／体下部縦ミガキ／胴部内面横ハケ 目調整・顔調整／ 外面：横・縦へら磨き調整／内外面赤彩	細顆砂粒多量	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

第6表 24号住居跡出土遺物一覧

第3節 古墳時代後期・平安時代

(1) 概要

古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構として、住居跡4軒、掘立柱建築遺構1棟・溝跡2条・土坑4基・ピット13本を調査した。遺物は遺構外出土も含め、須恵器、土師器、土製品、鉄製品など合計792点が出土した。

(2) 住居跡

73号住居跡

遺構 (第9～11図/図版3-3～5)

位置 (G-17・18) グリッド。

検出状況 2区中央北部で検出された。南西隅を近代の攪乱により削平され、南東側を13号溝に切られる。

構造 平面形：方形。規模：長軸(東西)3.50m、短軸(南北)3.30mを測る。床面までの深さは約45cm。主軸方位：N-9°-W。壁溝：北東隅を除いて全周する。床面：貼床。厚さは3cm前後。カマド：北壁中央に位置する。北東部には棚状施設が付属する。規模は長軸185cm、短軸110cm、深さ50cmを測る。住居北壁から煙道の先端まで約130cmを測り、煙道部が非常に長い。柱穴：2本確認された。南側中央部のP1は出入口ピットと推定される。

覆土 暗褐色土を基調とした7層に区分される。おおむね自然堆積の様相を呈する。

遺物 70点の遺物が出土した。須恵器10点、土師器59点、鉄製品1点が出土している。鉄製品は細片で器種は不明である。

時期 平安時代、9世紀前葉(鳩山V期)と考えられる。

遺物 (第12図/第7表/図版7-2)

4点を図示した。1～3は須恵器坏である。1・2は底部周縁部へラ削りが施され、3は底部糸切後無調整である。4は土師器甕である。接合しないが、胎土の様相から同一個体と推測される。

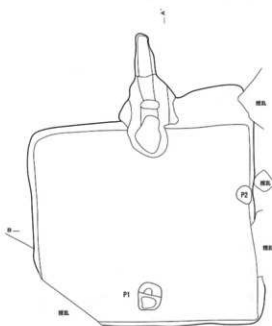
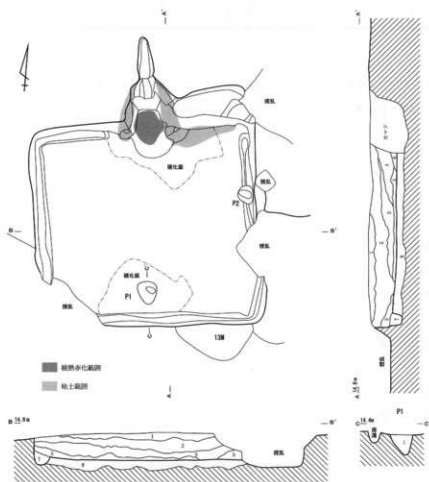
74号住居跡

遺構 (第13～17図/図版3-6～4-4)

位置 (J・K-12・13) グリッド。

検出状況 1区中央北部で検出された。南西隅部を近代の畝に切られる。

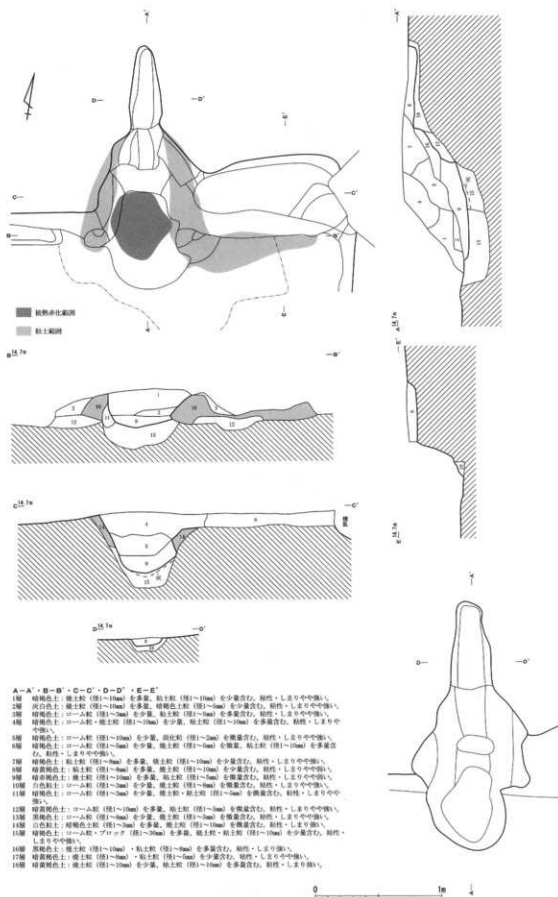
構造 平面形：長方形。規模：長軸(東西)3.80m、短軸(南北)3.30mを測る。床面までの深さは約35cm。主軸方位：N-97°-W。壁溝：南壁際、北東角部にめぐる。床面：貼床。厚さは3cm前後。カマド：3箇所検出された。西側のカマドが最も新しく袖部も残存しており、その他のカマドは袖部が残されており、古いカマドと判断している。西壁中央のカマドをA、東壁中央南寄りのカマドをB、北壁中央東寄りのカマドをCとした。カマドAの規模は長軸115cm、短軸95cm、深さ32cmを測る。カマドBは長軸90cm、短軸70cm、深さ38cmを測る。住居内の袖部は認められず、燃焼部奥と煙道部が確認された。掘り方では住居内にも掘り込みが認められた。カマドCは長軸90cm、短軸70cm、



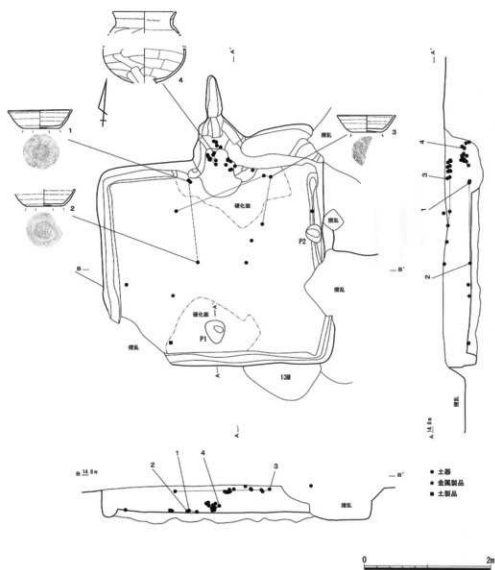
- A-A'・B-B'
- 1層 黒褐色土：ローム状（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 2層 黒色土：ローム状・粘土粒・焼土粒（厚1～5cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 3層 黒褐色土：ローム状（厚1～5cm）を少量含む、粘性・しまり中～強い。
 - 4層 黒褐色土：ローム状（厚1～3cm）・粘土粒（厚1～2cm）・焼土粒（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 5層 黒褐色土：ローム状（厚1～5cm）を少量、粘土粒（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 6層 暗茶褐色土：ローム状（厚1～5cm）・粘土粒・焼土粒（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 7層 暗茶褐色土：ローム状（厚1～8cm）を少量、焼土粒（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。
 - 8層 暗茶褐色土：ローム状（厚1～8cm）を少量、粘土粒（厚1～3cm）を露出含む、粘性・しまり中～強い。

0 2m

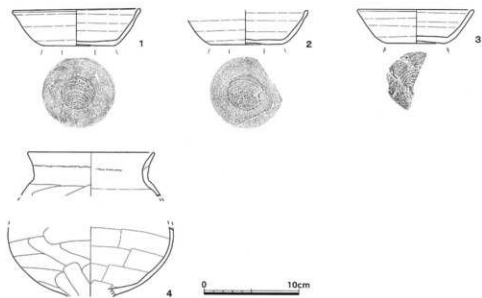
第9図 73号住居跡・掘り方（1/60）



第10図 73号住居跡カマド・掘り方 (1/30)



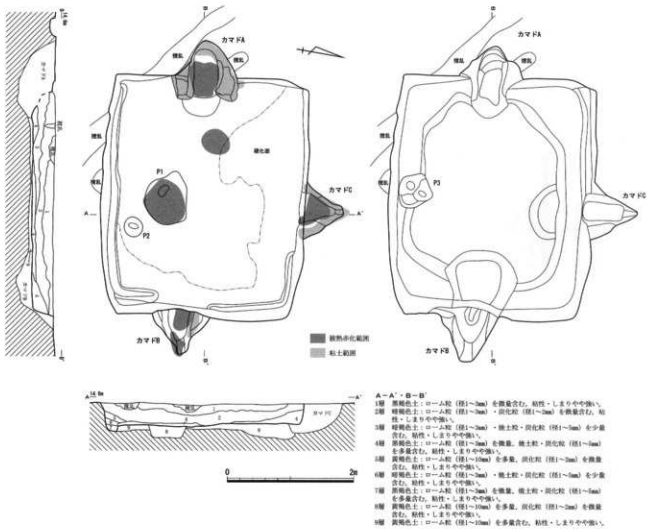
第11図 73号住居跡遺物出土状況 (1/60)



第12図 73号住居跡出土遺物 (1/4)

発掘番号	器物	遺存部分	口徑 箱底 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
第12図 1	須恵器 杯	完形	13.4 4.0 7.4	カマド脇	ロク右回転/底部周縁部ヘラ削り/箱山稜産	細砂粒少量 白色針状物質微量	良好	外面: 灰色 内面: 灰色
第12図 2	須恵器 杯	口縁~底部 片	(13.0) 3.7 7.7	カマド脇	ロク右回転/底部周縁部ヘラ削り/内面横ナデ・輪轆痕/箱山稜産	細粗砂粒少量 白色針状物質微量	良好	外面: 灰黄色 内面: 灰黄色
第12図 3	須恵器 杯	口縁~底部 半分	(12.0) 3.6 (6.0)	カマド脇	ロク右回転/底部回転車切痕/黄金子稜産	細粗砂粒微量	良好	外面: 灰色 内面: 灰色
第12図 4	土師器 甕	口縁~胴部 破片	(13.2) 115.3	カマド内	口縁部横ナデ/外面縦・斜ヘラ削り/内面横ナデ/武蔵型甕	細砂粒多量 赤色粒少量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色

第7表 73号住居跡出土遺物一覽



第13図 74号住居跡・掘り方 (1/60)

深さ 34cmを測る。住居内の袖部は確認されず、燃烧部奥と煙道部が確認された。住居掘り方においても掘り込みは認められない。これらのカマドの状況から、住居構築当初は北カマドであったが、その後東カマドへと造り変え、さらに西カマドへと変遷しているものと想定される。柱穴：2本の柱穴が確認された。P1・2ともに床下から確認されている。

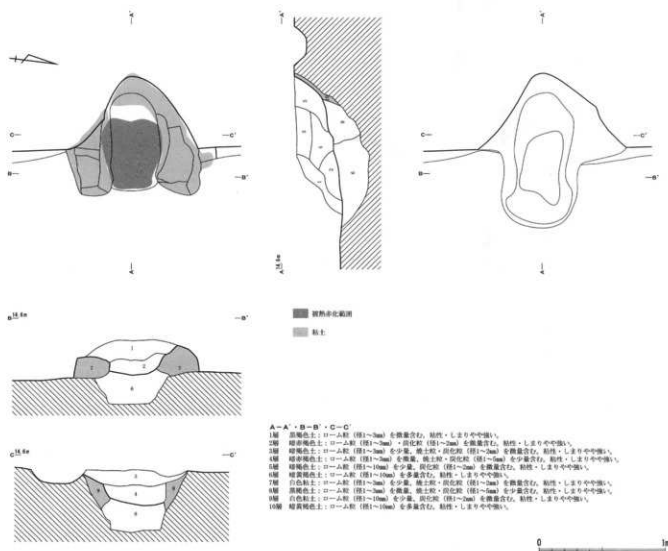
〔覆土〕 暗褐色土を主体とした7層に区分される。おおむね自然堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 206点の遺物が出土した。須恵器51点、土師器152点、焼成粘土塊2点、鉄製品1点が出土している。

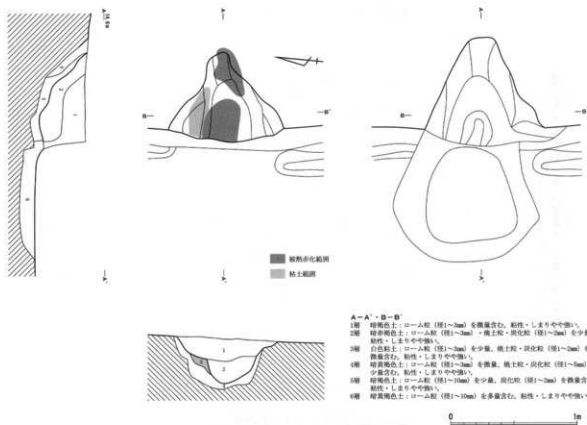
〔時期〕 出土遺物から平安時代、9世紀中葉（鳩山Ⅶ期）と考えられる。

〔遺物〕 (第18図/第8表/図版8-1)

1～4は須恵器坏である。5は須恵器碗、6は須恵器碗蓋で、胎土から同一個体と推定される。7・8は土師器坏、9～12は土師器甕である。13は鉄製品紡錘車の紡輪で、中央部に孔があいている。

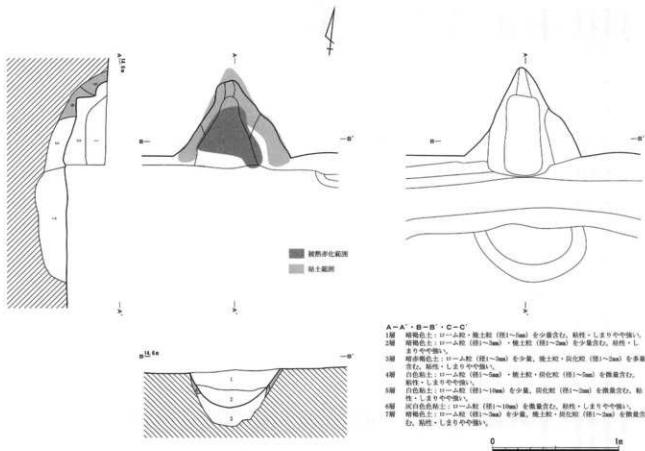


第14図 74号住居跡カマドA・掘り方 (1/30)



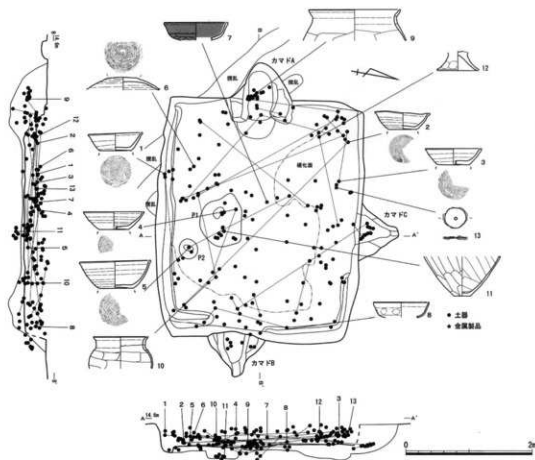
- A-A'・B-B'
- 1層 暗褐色土：ローム層（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 2層 暗赤褐色土：ローム層（厚1～2cm）、焼土粒・炭化粒（厚1～2cm）を少量含む。黏性・しまり中～強い。
 - 3層 白色粘土：ローム層（厚1～2cm）を少量、焼土粒・炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 4層 暗赤褐色土：ローム層（厚1～2cm）を数層、焼土粒・炭化粒（厚1～2cm）を少量含む。黏性・しまり中～強い。
 - 5層 暗褐色土：ローム層（厚1～10cm）を少量、炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 6層 暗赤褐色土：ローム層（厚1～10cm）を少量含む。黏性・しまり中～強い。

第15図 74号住居跡カマドB・掘り方 (1/30)



- A-A'・B-B'・C-C'
- 1層 暗褐色土：ローム層（厚1～5cm）を少量含む。黏性・しまり中～強い。
 - 2層 暗褐色土：ローム層（厚1～2cm）、焼土粒（厚1～2cm）を少量含む。黏性・しまり中～強い。
 - 3層 暗赤褐色土：ローム層（厚1～2cm）を少量、焼土粒・炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 4層 白色粘土：ローム層（厚1～2cm）を少量、炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 5層 暗褐色土：ローム層（厚1～10cm）を少量、炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 6層 灰白色粘土：ローム層（厚1～10cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。
 - 7層 暗褐色土：ローム層（厚1～2cm）を少量、焼土粒・炭化粒（厚1～2cm）を数層含む。黏性・しまり中～強い。

第16図 74号住居跡カマドC・掘り方 (1/30)

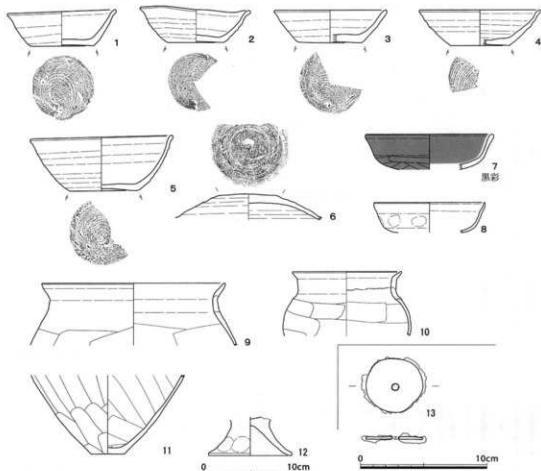


第17図 74号住居跡遺物出土状況(1/60)

検出番号	種類	遺存部位	口径 底径 高さ	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
第18図1	須恵器 環	完形	11.3 3.9 6.5	土層	ロクロ右回転/底部回転未切痕/東金子窯産	細砂粒微量	良好	外面: 灰黄色 内面: 灰黄色
第18図2	須恵器 環	口縁部~底 部	11.4 3.9 5.8	下層	ロクロ右回転/底部回転未切痕/埴山窯産	微細砂粒少量 白色針状物質微量	良好	外面: 灰色 内面: 灰色
第18図3	須恵器 環	口縁部~底 部	11.7 3.5 6.8	下層	ロクロ右回転/底部回転未切痕/埴山窯産	細砂粒少量 白色針状物質微量	良好	外面: 青灰色 内面: 青灰色
第18図4	須恵器 環	口縁部~底 部片	(12.6) 11.7 3.8 (6.2)	上層	ロクロ右回転/底部回転未切痕/埴山窯産	細砂粒微量 白色針状物質微量	良好	外面: 青灰色 内面: 青灰色
第18図5	須恵器 環	口縁部~底 部	14.7 6.0 7.1	下層	ロクロ右回転/底部回転未切痕/東金子窯産	微細砂粒少量	良好	外面: 灰色 内面: 灰色
第18図6	須恵器 板蓋	天井部	-	上層	天井部右回転へ少削り/東金子窯産	細砂粒少量	良好	外面: 灰色 内面: 灰色
第18図7	土師器 環	口縁部~体 部片	(13.3) 13.0	上層	内面: 口縁部横ナデ/黒彩 外面: 体部縦へ少削り/黒彩/在地系土師器/混入品か	砂粒やや多量 石英微量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色
第18図8	土師器 環	口縁部~体 部片	(11.6) 13.2	下層	内面: 口縁部横ナデ/黒彩か 外面: 体部外面指頭押捺痕/黒彩か/北武蔵型環か	細砂粒微量 赤色粒子微量	良好	外面: 暗茶褐色 内面: 暗茶褐色
第18図9	土師器 環	口縁部片	(19.2) 16.55	カマドA	内面: 口縁部横ナデ/胴部横ナデ 外面: 横へ少削り	細砂粒少量 石英微量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色
第18図10	土師器 環	口縁部~体 部片	11.6 16.91	下層	内面: 口縁部横ナデ/横へ少削り 外面: 横へ少削り	微細砂粒微量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色
第18図11	土師器 環	胴上部~底 部	18.4 (3.6)	下層	内面: 胴へ少削り 外面: 縦・斜へ少削り	微細砂粒少量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色
第18図12	土師器 環	胴部破片	(4.1) (8.6)	下層	内面: 胴部横ナデ 外面: 指頭押捺痕	細砂粒微量	良好	外面: 赤褐色 内面: 赤褐色

検出番号	種別	出土位置	最大長	最大幅	最大厚	重量	特徴・調整
第18図13	鉄製品 紡錘車	下層	5.15	4.50	0.21	11.4	紡錘部分/穿孔径3.00

第8表 74号住居跡出土遺物一覽



第18図 74号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

75号住居跡

遺構 (第19図/図版4-5)

位置 (P-11・12) グリッド。

検出状況 4区南東部南側で検出された。北壁の一部が確認され、西・南・東側は調査区外に至る。

構造 平面形：不明。規模：検出された範囲は、南北2.00m、東西0.80mを測る。床面までの深さは約60cm。主軸方位：不明。壁溝：なし。床面：貼床。厚さは3cm前後。カマド：なし。柱穴：なし。

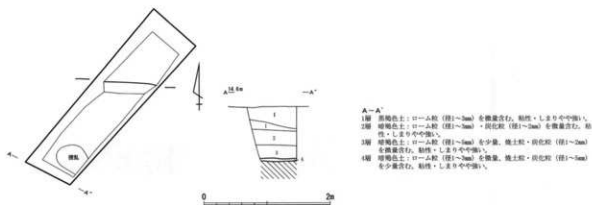
覆土 黒褐色土を主体とした3層に区分される。

遺物 19点の遺物が出土した。須恵器4点、土師器15点が出土している。

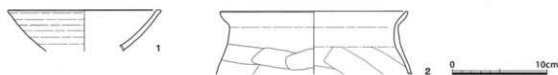
時期 数は少ないが出土遺物から平安時代、9世紀以降と考えられる。

遺物 (第20図/第9表/図版8-2)

1は須恵器坏である。2は土師器甕口縁部片である。



第19図 75号住居跡 (1/60)



第20図 75号住居跡出土遺物 (1/4)

発出 番号	器種	遺存部位	口縁 高さ 厚さ	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
第20図 1	須恵器 環	口縁部~体 部片	(16.0) [4.4]	上層	ロクロ右回転/底面回転車切痕/東金子葉	細砂粒少量 石英微塵	良好	外面：灰色 内面：灰色
第20図 2	土師器 甕	口縁部~胴 上部	(19.7) [6.75]	上層	内面：口縁部横ナデ/胴内面横ヘラナデ 外面：胴部外面横ヘラナデ/瓦葺型装	微細砂粒微塵	良好	外面：赤褐色 内面：赤褐色

第9表 75号住居跡出土遺物一覧

76号住居跡

遺 構 (第21~23図/図版4-6~5-1)

[位 置] (Q・R-6・7) グリッド。

[検出状況] 4区北部東側で検出された。北西隅部、南側、東側が調査区外に至る。

[構 造] 平面形：方形と推定される。規模：確認された南北長は6.70mを測り、一辺7m前後の大型住居と推測される。床面までの深さは約75cmを測る。主軸方位：N-52°-E。壁溝：あり。全周するものと推定される。床面：貼床。厚さは3cm前後。カマド：東壁中央に位置する。長軸98cm、短軸94cm、深さ77cmを測る。柱穴：3本の柱穴が確認された。P1は貯蔵穴、P2・P3は支柱穴と想定される。

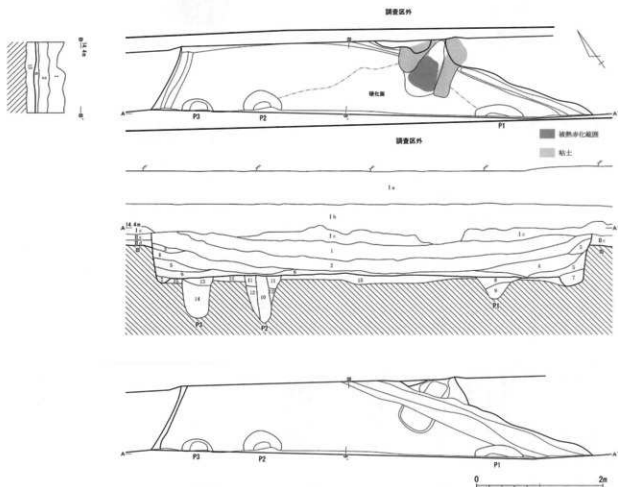
[覆 土] 暗褐色土を主体とした7層に区分される。

[遺 物] 360点の遺物が出土した。須恵器3点、土師器356点、焼成粘土塊1点が出土している。

[時 期] 出土遺物から古墳時代後期、7世紀後半と考えられる。

遺 物 (第24図/第10表/図版8-4)

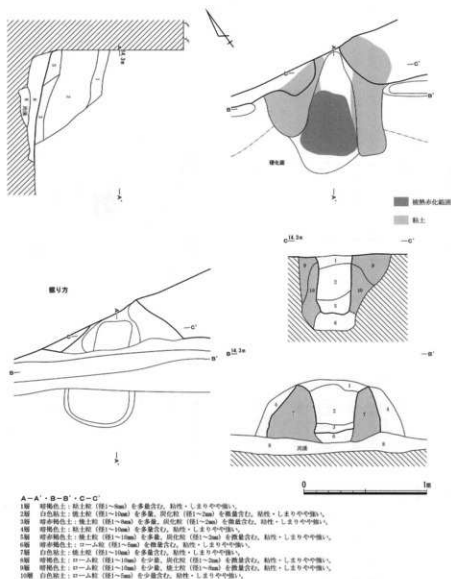
1から5は土師器丸底環で、いずれもカマド内あるいはカマド周辺からの出土である。6は土師器鉢の口縁部から体部である。



A-A'・B-B'

- 1層 黒褐色土：①→△程 (厚1~5cm) 全少量含む。粘性・しまり中強い。
 2層 黒褐色土：②→△程 (厚1~5cm) 炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 3層 黒褐色土：③→△程 (厚1~2cm) 全微量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 4層 黒褐色土：④→△程 (厚1~5cm) 全少量。炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 5層 黒褐色土：⑤→△程 (厚1~2cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 6層 黒褐色土：⑥→△程 (厚1~5cm) 全微量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 7層 黒褐色土：⑦→△程 (厚1~5cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 8層 黒褐色土(砂)：⑧→△程 (厚1~5cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 9層 黒褐色土(砂)：⑨→△程 (厚1~5cm) 全微量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 10層 黒褐色土(砂)：⑩→△程 (厚1~5cm) 全少量。炭化粒 (厚1~5cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 11層 黒褐色土(砂)：⑪→△程 (厚1~10cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 12層 黒褐色土(砂)：⑫→△程 (厚1~5cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) 全少量含む。粘性・しまり中強い。
 13層 黒褐色土(砂)：⑬→△程 (厚1~10cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 14層 黒褐色土(砂)：⑭→△程 (厚1~10cm) 全少量。粘土粒・炭化粒 (厚1~2cm) を微量含む。粘性・しまり中強い。
 15層 黒褐色土：⑮→△程 (厚1~10cm) 全少量含む。粘性・しまり中強い。掘り方。

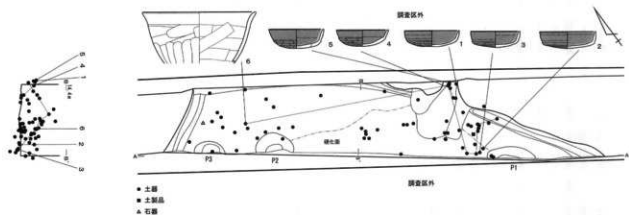
第21図 76号住居跡・掘り方 (1/60)



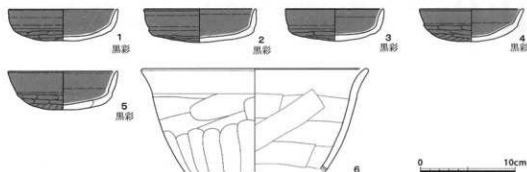
第22図 76号住居跡カマド・掘り方 (1/30)

検出番号	器種	遺守部位	口縁 高さ 直径	出土位置	特徴・装飾	胎土	焼成	色調
第24図1	土師器 環	宛形	11.4 3.4 —	カマド	内面：回転ナデ/黒彩 外面：体部底部横へつ削り/黒彩/在地系土師器	砂粒やや多量・金雲母少量 石英・小石微量	良好	外面：褐色 内面：褐色 胎土は黄褐色
第24図2	土師器 環	宛形	11.7 3.6	カマド跡	内面：回転ナデ/黒彩 外面：体部底部横へつ削り/黒彩/在地系土師器	砂粒やや多量・角閃石少量 石英・金雲母・小石微量	良好	外面：褐色 内面：褐色 胎土は黄褐色
第24図3	土師器 環	宛形	10.25 3.5 —	カマド跡	内面：回転ナデ/黒彩 外面：体部底部横へつ削り/黒彩/在地系土師器	砂粒やや多量 石英・金雲母・小石微量	良好	外面：褐色 内面：褐色 胎土は黄褐色
第24図4	土師器 環	半球宛形	10.8 3.5	カマド	内面：回転ナデ 外面：体部底部横へつ削り/黒彩/在地系土師器	砂粒やや多量 石英・金雲母微量	良好	外面：褐色 内面：褐色 胎土は黄褐色
第24図5	土師器 環	半球宛形	11.4 4.1 —	カマド	内面：回転ナデ/黒彩 外面：体部底部横へつ削り/黒彩/在地系土師器	砂粒やや多量・角閃石少量 石英・小石少量	良好	外面：褐色 内面：褐色
第24図6	土師器 鉢	口縁部～体 部片	(23.6) [11.0]	カマド	内面：口縁部横・斜ナデ 外面：口縁部横ナデ/体部横・縦へつ削り	細砂粒少量 石英・金雲母小石微量	良好	外面：暗赤褐色 内面：暗赤褐色 胎土は黄褐色

第10表 76号住居跡出土遺物一覧



第23図 76号住居跡遺物出土状況(1/60)



第24図 76号住居跡出土遺物(1/4)

(3) 掘立柱建築遺構

4号掘立柱建築遺構

遺構 (第26図/図版5-2・3)

[位置] (H・I・J-13・14) グリッド。

[検出状況] 1区西部で検出された。10本の柱穴が確認された。13号溝跡に切られる。

[構造] 平面形:P 1～5は東西に直線状に並び、その南側に5本の柱穴が不規則に並ぶ。桁行2間、梁行2間に、西側に2本の柱穴が付属する形となる。しかし、北東中央の柱穴が認められず、やや変則的な配列となる。**規模:**北側の東西・南北2間の範囲では一辺約4.60mを測り、5本並ぶ北側は8.25mとなる。10本の柱穴は平面形は楕円形を呈し、規模は45～102cmを測る。確認面から柱穴底部までの深さは35～75cmである。柱穴間の距離は約1.9～2.0mと推定される。**主軸方位:** N-66°-E。

[覆 土] 暗褐色土を主体とした2～4層に分層される。P 1・2・4・5・6・9では柱跡が確認されている。

[遺 物] なし。

[時 期] 平安時代。

(4) 溝 跡

13号溝跡

遺 構 (第27図/図版5-4・5)

[位 置] (G-17・18、H-15～17、I-13～15、J-12・13) グリッド。

[検出状況] 1・2区中央西部で検出された。北側は調査区外に至り、南側は3区境界の攪乱で途切れる。南側で73号住居を切り、北側で4号掘立柱建築遺構を切る。

[構 造] 平面形：南北に直線状に延びる溝状を呈する。調査区内で攪乱に分断されるが、確認された全長約34mを測る。断面形：浅い皿状を呈する。規模：幅115cm、深さ35cmを測る。走行方位：N-30°-E。硬化面：確認されていない。

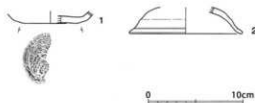
[覆 土] 暗褐色土を主体とし、2層あるいは3層に分層される。

[遺 物] 須恵器8点、土師器16点が出土している。

[時 期] 9世紀前半の73号住居跡を切って構築されているため、平安時代でも9世紀後半以降のものとして推定される。

遺 物 (第25図/第11表/図版8-3)

1は須恵器坏底部で、底部に右回転糸切痕が無調整で施される。2は外面端部に稜を持つことから、須恵器坏蓋と推定される。



第25図 13号溝跡出土遺物(1/3)

遺物番号	名称	遺存部位	口徑 器高 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	焼成	色調
第26図1	須恵器坏	底部片	— (1.3) (6.0)	上層	ロクロ右回転/底部回転糸切痕/堀山産	細砂粒多量 白色針状物質微量	良好	外面：灰色 内面：灰色
第26図2	須恵器蓋	天井部片	(12.0) (2.8) —	上層	ロクロ右回転	細粗砂粒少量	良好	外面：黄灰色 内面：黄灰色

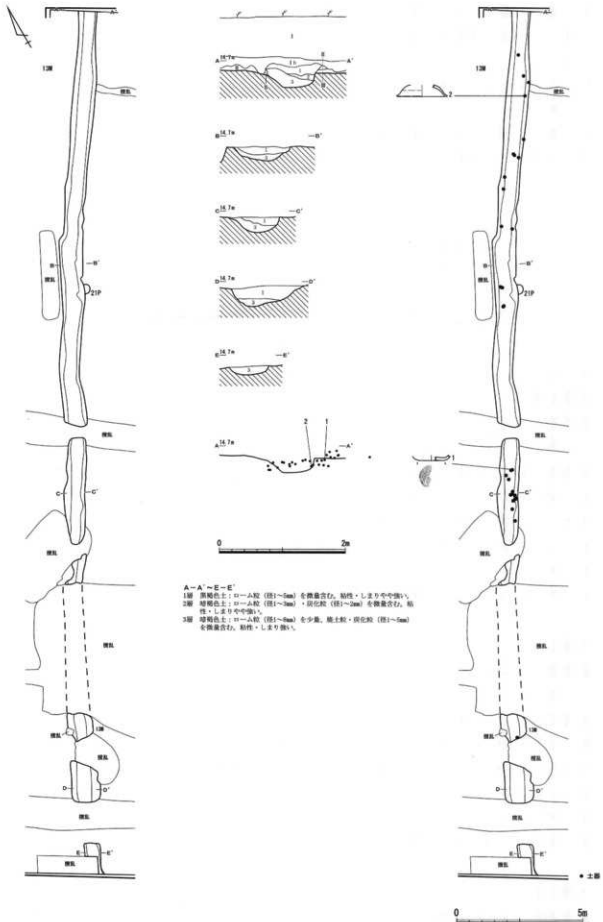
第11表 13号溝跡出土遺物一覧

14号溝跡

遺 構 (第28図/図版5-6・7)

[位 置] (O-5) グリッド。

[検出状況] 4区中央西部で検出された。北・南側は調査区外に至る。



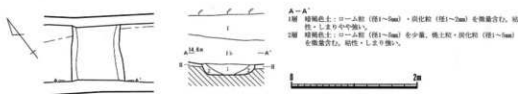
第27図 13号溝跡 (1/150・1/60)

[構造] 平面形：南北に直線状に延びる溝状を呈する。確認された全長約84cmを測る。断面形：浅い皿状を呈する。規模：幅92cm、深さ15cmを測る。走行方位：N-32°-E。硬化面：確認されていない。

[覆土] 暗褐色土を主体とし、2層に分層される。

[遺物] なし。

[時期] 時期を示す遺物は検出されていないが、13号溝跡の北側の延長線上にあり、主軸方も近いことから、同一の溝跡である可能性がある。



第28図 14号溝跡 (1/60)

(5) 土坑

222号土坑

[遺構] (第29図/図版5-8)

[位置] (K-13) グリッド。

[検出状況] 1区中央北側で検出された。

[構造] 平面形：円形を呈する。断面形：皿形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模：長軸106cm/短軸100cm/深さ20cm。長軸方位：N-55°-E。

[覆土] 暗褐色土を主体とした2層に区分される。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から古墳時代後期以降と考えられる。

223号土坑

[遺構] (第29図/図版6-1)

[位置] (J-14) グリッド。

[検出状況] 1区中央北側で検出された。

[構造] 平面形：円形を呈する。断面形：すり鉢状を呈し、壁面はなだらかに立ち上がり、底面は非常に狭い。規模：長軸101cm/短軸83cm/深さ42cm。長軸方位：N-18°-E。

[覆土] 暗褐色土を主体とした2層に区分される。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から古墳時代後期以降と考えられる。

224号土坑

[遺構] (第29図/図版6-2)

[位置] (K-12) グリッド。

[検出状況] 1区中央北側で検出された。北側、東側は調査区外に至る。

[構造] 平面形:確認された範囲では方形を呈する。断面形:逆台形を呈し、壁面は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模:確認された長軸70cm/短軸46cm/深さ28cm。長軸方位:不明。

[覆土] 暗褐色土を主体とした2層に区分される。

[遺物] なし。

[時期] 覆土の様子から古墳時代後期以降と考えられる。

225号土坑

遺構 (第29図/図版6-3)

[位置] (O-2) グリッド。

[検出状況] 4区北西側で検出された。

[構造] 平面形:円形である。断面形:逆台形を呈し、壁面は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模:長軸114cm/短軸111cm/深さ54cm。長軸方位:N-45°-W。

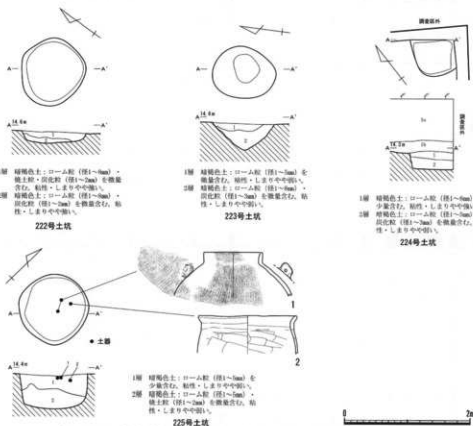
[覆土] 暗褐色土を主体とした2層に区分される。

[遺物] 須恵器甕3点、土師器甕1点が出土している。

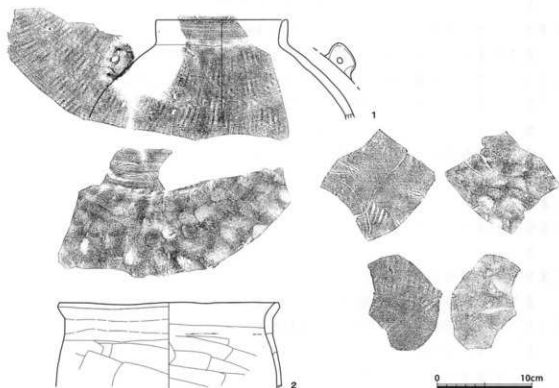
[時期] 出土遺物と覆土の様子から平安時代、9世紀後葉以降と考えられる。

遺物 (第30図/第12表/図版9-1)

1は須恵器短頸壺口縁部から胴部上半である。肩部に耳が付く。内面にタタキ目、外面にあて貝殻がみられる。2は土師器甕口縁部片である。



第29図 古墳時代後期後半~奈良・平安時代の土坑 (1/60)



第30図 225号土坑出土遺物(1/4)

検出番号	器種	遺存部位	口徑 底径 底径	出土位置	特徴・調整	胎土	磨成	色調
第30図1	須恵系 短頸甕	底部片	(13.6) (10.4)		内面：口縁部横ナデ／胴部内面あて具痕 外面：胴部タタキ目／胴部耳取付／東海系？	黒細砂少量 赤色粒子微量	良好	外面：灰色 内面：灰色
第30図2	土師系 甕	口縁部片	(23.0) (9.2)		内面：口縁部横ナデ／ヘラナデ 外面：胴部横ヘラ削り／胴部内面輪轆底／武蔵生表	細砂少量 石英微量	良好	外面：暗赤褐色 内面：暗赤褐色

第12表 225号土坑出土遺物一覧

(6) ビット

本調査地で検出したビット25本のうち、覆土の様子から13本を古墳時代以降に帰属するものとした。これらのうち、遺物の出土したビットはなく、一覧表にて報告する(第13表)。古墳時代以降の遺構の分布傾向は1区にやや集中する。

遺構名	グリッド	地区	平面形	長軸	短軸	深さ	覆土
7P	G-16	2区	円形	51.6	48.9	11.0	暗褐色土
8P	O-12	4区	円形	31.6	29.6	25.1	暗褐色土
9P	R-9	4区	円形	39.9	31.5	13.1	黒褐色土
10P	H-15	2区	円形	45.1	39.5	21.6	黒褐色土
11P	G-17	2区	円形	29.8	27.1	44.6	黒褐色土
12P	F-17	2区	円形	50.4	37.0	21.4	暗褐色土
13P	G-17	2区	円形	32.5	25.1	46.9	暗褐色土
14P	H-15	2区	円形	40.2	34.8	70.8	暗褐色土
15P	H-14	1区	円形	44.0	36.0	19.5	暗褐色土
16P	K-14	1区	円形	64.0	62.7	12.2	暗褐色土
23P	N-1	4区	円形	43.9	37.9	17.7	暗褐色土
24P	N-1	4区	円形	34.0	30.6	54.4	暗褐色土
25P	O-2	4区	円形	38.4	28.2	47.1	黒褐色土

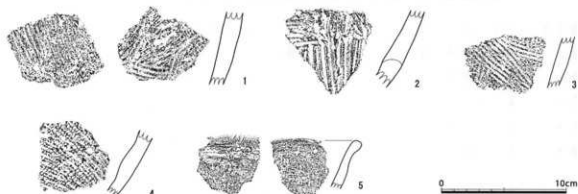
第13表 古墳時代以降のビット一覧

第4節 遺構外出土遺物

(1) 縄文時代

出土した縄文時代の遺物は、土器 28 点、石器石皿 1 点である。土器は早期 17 点・中期 1 点・時期不明 10 点)である。これらのうち、土器 5 点を図示した(第 31 図/第 14 表/図版 9-2)。

1～3 は深鉢胴部片で、貝殻背圧痕が施され、早期条痕文系土器に比定される。4 は単節 R L 縄文が施され、胎土に繊維を含まないことから、前期前半のものと推定される。5 は時期不明である。



第 31 図 遺構外出土遺物 (1/3)

出土遺物番号	種類	遺存部位	出土位置	特徴・装飾	胎土	焼成	色調	時期・型式
第 31 図 1	深鉢	胴部破片	1 区表土	内外面縦位貝殻背圧痕文	砂粒少量/繊維多量	良好	外面：暗赤褐色/内面：にぶい黄褐色	早期後半・条痕文系
第 31 図 2	深鉢	胴部破片	2 区表土	外面縦位貝殻背圧痕文	細砂粒少量/繊維多量	良好	外面：暗赤褐色/内面：にぶい褐色	早期後半・条痕文系
第 31 図 3	深鉢	胴部破片	3 区表土	外面斜位貝殻背圧痕文	砂粒少量/繊維多量	良好	外面：褐色/内面：にぶい暗褐色	早期後半・条痕文系
第 31 図 4	深鉢	胴部破片	74H 覆土	単節 RL 縄文	砂粒少量/小石少量	良好	外面：明褐色/内面：明褐色	前期前半?
第 31 図 5	深鉢	口縁部破片	3 区表土	口縁部外面に張り出す	細砂粒多量/小石微量	良好	外面：赤褐色/内面：赤褐色	時期不明

第 14 表 遺構外出土遺物一覧(縄文時代)

第4章 調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代後期から奈良・平安時代に至るまでの遺構・遺物が検出された。これまでの調査に加えて田子山遺跡に新たな資料を加えることとなった。以下に時代を追って各時期の調査成果についてまとめておきたい。

第1節 縄文時代

本調査地では4基の土坑と12本のピットが確認された。遺物は縄文土器28点、石器が1点出土した。遺構は1～4区の広い範囲で検出されたが非常に散漫な分布で、1区中央部にピットがやや集中する程度である。縄文土器は早期が中心となって17点出土し、中期1点、不明10点である。石器は安山岩製の石皿1点が出土しているが、平安時代の75号住居跡覆土から出土している。土坑の時期については、219号土坑からは早期の土器が1点出土しているため、早期のものと考えられる。それ以外の遺構は遺物を伴わず、詳細時期は不明である。

第2節 弥生時代後期

本調査地では1軒の住居跡が確認され、遺物は弥生土器が17点出土した。24号住居跡は4区北西端で検出され、西側、北側は調査区外に至る。北側は第31地点で調査されており、その規模は南北約4.5mの隅丸方形の住居跡と推定される。床面上からは高坏や壺が出土し、炭化物と焼土が多く見られることから焼失住居と想定される。住居跡の時期は、出土した壺頸部の文様やへら磨き調整の施された高坏の特徴が、東海地方の影響を示すものではない、などの様相から弥生時代後期後葉のものと推定される。

第3節 古墳時代後期・平安時代

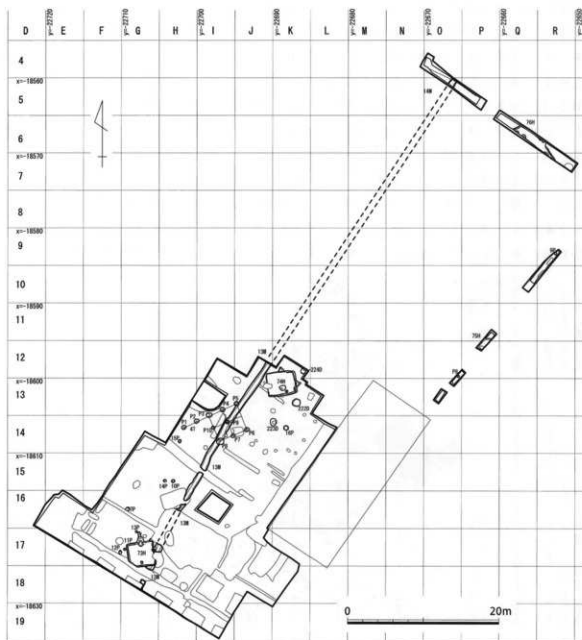
本調査地では、住居跡4軒・掘立柱建築遺構1棟・溝跡2条・土坑4基、ピット13本が検出され、遺物は須恵器、土師器、土製品、鉄製品など792点が出土している。

住居跡は4軒検出された。南側の2区で1軒(73H)、中央の1区で1軒(74H)、北側の4区で2軒(75・76H)である。住居跡の時期は、76Hは底部丸底の黒彩土師器坏などの小型化の様相から、古墳時代後期の7世紀後葉と推定される(尾形 2006)。73Hは鳩山窯産(渡辺他 1990)の底部周縁部へら削りの坏などが出土していることから9世紀前葉(鳩山V期)、74Hは3基のカマドを持つため、その存続の時間幅は長いものと考えられるが9世紀中葉(鳩山VII期)、75Hは出土遺物が少なく確定しがたいため9世紀以降(鳩山VI期以降)と判断される。このように、田子山遺跡第131地点で検出された4軒の住居跡は古墳時代後期1軒、平安時代3軒であった。

北側の4区の75・76 Hについてはトレンチ状の調査区のために全容を把握することはできなかったが、調査区の広い範囲にわたって住居跡が分布している様相が明らかとなった。74 Hの3基のカマドの変遷は北→東→西カマドの順に構築されており、南側に入口ピットがあることから、南側が入口として利用されていたことが明らかとなった。76 Hは部分的な調査であるが、出土遺物から7世紀後葉の一辺約7mの大型住居跡であり、カマド周辺から土師器の丸底坏が5点まとまって出土した。それらは全面に黒彩が施された、北関東系土器を模倣した在地系土師器である。

1区西部では1棟の掘立柱建築遺構(4T)が検出された。確認された柱穴は10本で、北側に東西に5本の柱穴が直線上に並び、その南側に2本、さらに南側に3本並び、やや変則的な配列となる。東側部分を2間×2間の総柱建物とすると、東中央に1本柱穴が欠くが、配列としては2間×2間の総柱建物の北西部に2本の柱穴が張り出す形となる。

溝跡が2本確認された。1・2区を南北に縦断する13Mと、4区で確認された南北方向の14Mで



第32図 溝跡分布・想定図(1/500)

ある(第35図)。13 Mは幅約115cm、深さ約35cm、攪乱に分断されて断絶があるが、全長は34mを測る。南側は3区では検出されず、1区では調査区外に至る。時期は73 Hを切るため、9世紀後葉以降と推定され、今回の調査では最も新しい遺構である。14 Mは、13 Mの北側延長上の4区で検出された。遺物は出土していない。幅約92cm、深さ約15cmを測り、断面形は13 Mに近似して、同一方位を指し、南北両端ともに調査区外に至る。

13 M北端から14 M南端までは44mの距離があるが、その軸向きから同一の溝跡である可能性が高い。その想定で溝跡の全長を算出すると、南北に約80mの長さを測る。

土坑は4基検出された。1区の74 Hの周囲に3基が集中し、4区北西部に1基検出された。4区北西部で検出された225 Dは肩部に耳のついた須恵器短頸壺や土師器杯が出土し、9世紀末葉のものとして推定される。

さらに、先述の13・14 Mについて、周辺の成果も合わせてさらに考えてみたい。今回の調査区内で検出されたのは、推定全長約80mの南北に走ると想定される溝跡である。周辺の調査区で検出された溝跡についてみると、今回の調査区の南東側に隣接する第69地点では、ほぼ同規模の2 M(9世紀後葉以降)が東西方向に約11m確認されている(第36図、尾形・佐々木・深井 2002)。また、そのさらに東側の第24地点で検出された1 Mとほぼ直行する軸向きとなる(平成5年度調査)。そのため、あくまでも推定であるが、1・2・13・14 Mは方形の区画溝の一部である可能性があり、全体の南東辺が確認されつづくと想定される。区画の内と外を分ける原因は明らかではないが、何らかの境界であると考えられる。現段階では、南北90m以上の方形区画溝である可能性が非常に高いといえる。

このように、区画溝などの大型の遺構については、いくつもの発掘調査の成果をつなぎ合わせることでその規模などが明らかとなることが多く、小規模な調査の積み重ねが非常に重要といえよう。

今回の調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代後期後半の住居跡1軒、平安時代の住居跡3軒、掘立柱建築遺構1棟、溝跡2条、土坑など、さまざまな遺構・遺物が検出され、田



第33図 近隣の溝跡分布図(1/3,000)

子山遺跡の各時期の様相の一端が垣間見えたといえよう。

[引用・参考文献]

- 尾形剛敏・佐々木保俊・深井恵子 2002『志木市遺跡群 12』志木市の文化財第 32 集
- 尾形剛敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群 9』志木市の文化財第 27 集 埼玉県志木市教育委員会
2001『埋蔵文化財調査報告 2』志木市の文化財第 31 集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子・青木 修 2004『志木市遺跡群 14』志木市の文化財第 36 集 埼玉県志木市教育委員会
2005『城山遺跡第 42 地点』志木市遺跡調査会調査報告第 10 集 埼玉県志木市教育委員会
2008『城山遺跡第 61 地点』志木市遺跡調査会調査報告第 16 集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡他 2013『城山遺跡第 71 地点』志木市の文化財第 54 集 埼玉県志木市教育委員会
2014『志木市遺跡群 21』志木市の文化財第 58 集 埼玉県志木市教育委員会
- 尾形剛敏 2001『志木市における古墳時代の土師器の編年(2) —5世紀から7世紀の甗・甗形土器の変遷—』『あらかわ』第 4 号 あらかわ考古談話会
2002『武蔵野台地北西部における古墳時代の地域性—集落を中心とする5世紀から7世紀の土器様相—』『あらかわ』第 5 号 あらかわ考古談話会
2005『荒川下流右岸地域における古墳時代中・後期の様相(2)』『あらかわ』第 8 号 あらかわ考古談話会
2006『7世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例—』『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立 50 周年記念論文集
2007『古墳時代後期の土師器研究の再認識—(仮称)「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として—』『埼玉考古』第 43 号 埼玉考古学会
- 埼玉県 1982『新編埼玉県史 資料編 2 原始・古代 弥生・古墳』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982『縄文中期土器群の再編』『研究紀要 1982』
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1998『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第 4 集 埼玉県志木市遺跡調査会
- 志木市史編さん室 1986『志木市史』中世資料編
1990『志木市史』通史編上。
- 渡辺 一他 1990『鳩山原跡群Ⅱ』鳩山原跡群発掘調査報告書第 2 冊 鳩山原跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

1908

1909

1910

1911

1912

1913

1914

1915

1916

1917

1918

1919

1920

1921

1922

1923

1924

1925

1926

1927

1928

1929

1930

1931

1932

1933

1934

1935

1936

1937

1938

1939

1940

1941

1942

1943

1944

1945

1946

1947

1948

1949

圖 版



1. 1・2区全景



2. 3区全景



1. 4区全景（北西端部）



2. 219号土坑



3. 220号土坑



4. 221号土坑



5. 226号土坑



1. 24号住居跡



2. 24号住居跡 遺物出土状態



3. 73号住居跡



4. 73号住居跡 カマド



5. 73号住居跡 遺物出土状態



6. 74号住居跡



7. 74号住居跡 カマドA



8. 74号住居跡 カマドB



1. 74号住居跡 カマドC



2. 74号住居跡 遺物出土状態1



3. 74号住居跡 遺物出土状態2



4. 74号住居跡 掘り方



5. 75号住居跡



6. 76号住居跡



7. 76号住居跡 カマド



8. 76号住居跡 カマド遺物出土状態



1. 76号住居跡 P2



2. 4号掘立柱建築遺構1



3. 4号掘立柱建築遺構2



4. 13号溝跡



5. 13号溝跡 土層断面



6. 14号溝跡



7. 14号溝跡 土層断面



8. 222号土坑



1. 223号土坑



2. 224号土坑



3. 225号土坑



4. 旧石器時代試掘坑 T P 1



5. 見学風景 1



6. 見学風景 2



7. 作業風景



8. 作業風景



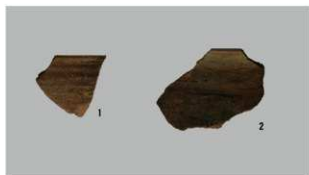
1. 24号住居跡出土遺物



2. 73号住居跡出土遺物



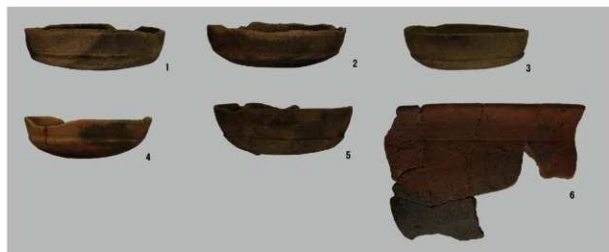
1. 74号住居跡出土遺物



2. 75号住居跡出土遺物



3. 13号溝跡出土遺物



4. 76号住居跡出土遺物



1. 225号土坑出土遺物



2. 遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たごやまいせきだい 131 ちてん まいごうぶんかざいはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	田子山遺跡第 131 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	志本市の文化財							
巻次	第 61 集							
編著者	尾形則敏 徳留彰紀 宮下孝徳							
編集機関	埼玉県志本市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志本市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	2015 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (°'〃)	東経 (°'〃)	発掘期間	発掘面積 (㎡) (開発面積)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
田子山遺跡 (第 131 地点)	志本市本町 2 丁目 1700-1	11228	09-010	35° 49' 56"	139° 34' 55"	20140602 ～ 20140817	1,076.12 (2,196.00)	校舎 建替 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
田子山遺跡 (第 131 地点)	集落	縄文時代 弥生時代後期 古墳時代後期 平安時代	土坑 4 基・ピット 12 本 住居跡 1 軒 住居跡 1 軒 住居跡 3 軒・掘立柱 建築遺構 1 棟・溝跡 2 条・土坑 4 基・ピット 13 本	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器・土師器・土 製品・鉄製品	弥生時代後期の住居跡 1 軒、古墳時代後期後半から平安時代の住居跡が 4 軒調査された。平安時代の南北の全長約 80m と推定される溝跡 (13・14 M) が検出され、区画溝の可能性がある。			
要約	田子山遺跡は志本市本町に所在し、今回の調査が第 131 地点となる。検出された遺構は縄文時代の土坑 4 基、弥生時代の住居跡 1 軒、古墳時代後期後半～奈良・平安時代の住居跡 4 軒、掘立柱建築遺構 1 軒、溝跡 2 条、土坑 4 基などである。出土遺物は検出された各遺構の時期の土器であり、なかでも古墳時代後期・平安時代の遺物が主体となり、住居跡からの出土が中心である。調査区を南北に走る平安時代の溝跡が 2 条検出され、両者の距離が離れているが南北にはほぼ同じ軸向きを示し、全長約 80m の溝跡が確認された。近隣の調査区でも溝跡が出土していることから、調査区東側が何らかの区画溝の内側である可能性がある。							

志本市の文化財 第 61 集

田子山遺跡第 131 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志本市教育委員会
埼玉県志本市中宗岡 1 丁目 1 番 1 号
発行日 平成 27 (2015) 年 3 月 31 日